

論文の内容の要旨

方向性を持った補助動詞に関する日韓対照研究

— 「ていく/くる」「てやる/くれる」と「e kata/ota」「e cwuta」について—

韓 京娥

本研究では、対照言語学という観点から補助動詞構文の中で方向性が含意されている日本語の「ていく/くる」、「てやる/くれる」とそれらに対応する韓国語の「e kata/ota」、「e cwuta」の意味・機能について考察を行った。併せて、移動主体の出発点から到着点へという移動に含意されている方向性と与え手から受け手への対象の移動という授受に含意されている方向性についても考察した。

以下、章ごとに内容を略述する。

第1章 序論では、問題提起及び構成について述べた。具体的には次の3点について問題を提起した。①「ていく/くる」、「てやる/くれる」とそれに対応する「e kata/ota」、「e cwuta」の相違点を明らかにする、②二つの構文における日本語と韓国語の相違点は、何に起因しているのか、③従来の日韓対照研究で一緒に取り上げられたことのない二つの構文を一緒に取り上げることによって移動と授受に含意されている方向性は、補助動詞構文ではどのような様相を呈しているかを観察し、日本語と韓国語の類似点と相違点について考察する。

第2章 先行研究では、「ていく/くる」、「e kata/ota」構文と「てやる/くれる」、「e cwuta」構文に関する先行研究について日本語学における研究、韓国語学における研究、日韓対照研究の順に検討した。先行研究の問題点として①日本語学と韓国語学では、「ていく/くる」、「てやる/くれる」と「e kata/ota」、「e cwuta」について早くから研究されているものの、十分に説明されていない現象があること、②「ていく/くる」と「e kata/ota」、「てやる/くれる」と「e cwuta」の意味・機能には、大きな相違点があるにも関わらず、従来の日韓対

照研究では、両言語の各意味・機能が対応しているかどうかという表面的な対応関係の指摘に留まっていること、③従来の研究では、「ていく/くる」と「e kata/ota」構文かあるいは「てやる/くれる」と「e cwuta」構文が別々に取り上げられているが、方向性という特徴を持っている二つの構文「ていく/くる」「e kata/ota」と「てやる/くれる」「e cwuta」を一緒に考察することによって日本語と韓国語の特徴がより明らかになる可能性があることを指摘した。

第3章 日本語の「ていく/くる」と韓国語の「e kata/ota」では、それぞれの本動詞「行く/来る」、「kata/ota」と関連付けて「ていく/くる」と「e kata/ota」について考察を行った。

従来の先行研究の指摘にならい、本動詞「行く/来る」と「kata/ota」の意味・機能を<空間表現><時間表現><心理表現><由来・起因><出現・生起><状態変化>に分類し考察した。その結果、「行く/来る」と「kata/ota」は、共に移動主体の空間移動を基本意味とし、時間表現やその他の意味・機能に変化している。ただし、「行く/来る」と「kata/ota」の基本意味である<空間表現>には、物理的出発点・到着点を重視するのか（「kata/ota」）それとも移動の到着点と話し手の関連性を重視するのか（「行く/来る」）という大きな相違点があることを明らかにした。

補助動詞構文「ていく/くる」と「e kata/ota」については、日本語の「ていく/くる」の意味・機能を軸とし、韓国語の「e kata/ota」と比較・対照した。

「ていく/くる」には、両構文が該当する意味・機能と「ていく」か「てくる」のどちらか一方のみの構文が該当する意味・機能がある。前者の<移動><継続><変化>には、「e kata/ota」が対応するのに対して、後者の<消滅><開始><出現><方向づけ>には、「e kata/ota」が対応しない。

ただし、一見「ていく/くる」と「e kata/ota」が対応し、類似した意味・機能を表すかのように見える<移動><継続><変化>の場合においても両言語には大きな相違点がある。<移動>では、「てくる」は、移動の物理的到着点が話し手にとって重要な場所であるかどうかを重視する。また、移動方向動詞と結合している場合到着点の重要性を意識し、物理的到着点になるかどうかのみを重視しない。一方、「e ota」は、移動の物理的到着点となるかどうかを重視する。<継続>では、「ていく」は、先行動詞の表す出来事の過程を重視しないのに対して、「e kata」は、それを重視する。<変化>では、日本語の方は、韓国語に比べ話し手と関係した出来事の変化であるかどうかを意識するのに対して、韓国語の方は、日本語に比べ時間の流れを伴う変化であるかどうかを意識する傾向がある。また、<消滅><開始><出現><方向づけ>の「ていく/くる」に「e kata/ota」が対応しないのは、本動詞「行く/来る」と「kata/ota」の「移動」の意味が保持されているかどうか起因しているという従来の指摘と違って、移動という出来事に要する「時間的幅」を保持しているかどうか起因していることが明らかになった。「ていく/くる」は、過程を重視しないこと、元来本動詞「来る」が話し手の縄張りを重視することから「e kata/ota」より広い意味・機能を持つようになったことを論じた。

さらに、「ていく/くる」は、出来事と話し手の関連を意識した解釈を優先するのに対して、「e kata/ota」は、出発点から到着点へという移動の方向性を重視した解釈が優先され、「ていく/くる」と「e kata/ota」の表す方向性は、異なる性格のものであることを指摘した。

第4章 日本語の「てやる/くれる」と韓国語の「e cwuta」では、それぞれの本動詞「やる/くれる」、「cwuta」と関連付けて「てやる/くれる」と「e cwuta」について考察を行った。

まず、本動詞「やる/くれる」と「cwuta」の意味特徴を考察した。「やる/くれる」は、対象の移動と恩恵、それから、話し手と与え手、受け手の関係が含意されているのに対して、「cwuta」は、移動のみを表す。

次に、補助動詞構文「てやる/くれる」と「e cwuta」については、日本語の「てやる/くれる」の意味・機能を軸とし、韓国語の「e cwuta」と比較・対照した。

「てやる/くれる」は、両構文が該当する意味・機能の〈恩恵〉と「てやる」か「てくれる」のどちらか一方のみの構文が該当する〈不利益〉〈自己顕示〉〈皮肉〉がある。

〈恩恵〉の「てやる/くれる」には「e cwuta」が対応する。ただし、「てやる/くれる」は、先行動詞の表す出来事への好ましさ、有難さという話し手の恩恵を表すのに対して、「e cwuta」は、先行動詞の表す出来事に対する関与者を表し、恩恵は語用論的に発生する。なお、韓国語の「e cwuta」は、話し手が与え手になる場合と受け手になる場合含意されている関与の表し方に差がある。話し手が与え手となる場合は、関与者と関係を作ろうとする与え手の意図的行為によって関与は表れやすい。一方、話し手が受け手となる場合は、対象が移動する場合、与え手が話し手のためと思ってわざわざ行う行為や話し手の代わりに行う行為、話し手の強い願いや期待がある場合に与え手との関与を表す傾向がある。

〈不利益〉の「てやる」にも「e cwuta」は、対応する。ただし、「てやる」は、先行動詞の表す出来事を行おうとする話し手の強い意志を表すのに対して、「e cwuta」は、関与者に働きかける話し手の意図を表す。なお、「てやる」と「e cwuta」の表す不利益は、共に元来先行動詞の表す意味や語用論的解釈によって発生している。

〈自己顕示〉の「てやる」は、受け手を想定しなくてもよく、先行動詞の表す出来事を実行しようとする話し手の強い意志を表すが、「e cwuta」は対応しない。「e cwuta」は、先行動詞の表す出来事への関与者を想定するためである。

〈皮肉〉においては、「てくれる」は、好ましくない、有難くない状況に対し、話し手が好ましい、有難いと表現することから皮肉が生じている。一方、「e cwuta」は、先行動詞の表す出来事を行う与え手の意図を皮肉っていることから生じている。

従来の日韓対照研究では、「てやる/くれる」と「e cwuta」が一致しているかどうかという表面的な対応関係のみを述べているのがほとんどで、両言語の違いについて詳細な考察を行っている研究は、皆無といってよいが、本研究は、「てやる/くれる」と「e cwuta」の類似点と相違点を明らかにすることができた。さらに、第三者が与え手、受け手となる場合、「てやる/くれる」は、話し手と出来事の関連性を表すのに対して、「e cwuta」は、与え手と受け手の関係を表す違いも明らかになった。

第5章 結論では、全体をまとめ、本研究の成果・意義と残された課題について述べた。本研究の成果・意義は次のとおりである。①従来の先行研究で指摘されていない「ていく/くる」と「e kata/ota」、「てやる/くれる」と「e cwuta」の相違点を明らかにしている点、②従来の先行研究で指摘されている「ていく/くる」と「e kata/ota」の相違点は、本動詞「行く/来る」と「kata/ota」の移動の意味が保持されているかどうかの差ではなく、本動詞の移動にかかわっている時間に起因していることを明らかにしている点、③「ていく/くる」と「e kata/ota」、「てやる/くれる」と「e cwuta」における意味変化、いわば、文法化の様相の差を明らかにしている点、④日本語の「ていく/くる」と「てやる/くれる」は、話し手と出来事の関連性を重視するのに対して、韓国語の「e kata/ota」と「e cwuta」は、出来事の構成要素を重視する。つまり、日本語の「私」は、出来事を中心であることを表すが、韓国語の「나 na (私)」は、出来事の参加者の一人であることを表し、両言語は出来事の把握に大きな差がある。